

- 39 36 34 32 30 27 26 24 22 連載
- キッチン菜時記／飛田和緒
きのうのあしもと、あすの空／文〓島津和嘉子 絵〓鈴木千佳子
真宗と大拙と私／池田向一
唯信鈔文意を読む―唯念仏のころ／山田恵文
出会いの真実―嘆仏偈を読むのココが大事／宮下晴輝
ペコロスのほどけてしゃがんで／岡野雄一
息できる風景／森泉岳土
歌壇／永田淳 俳壇／安原葉
同朋のひろば

- 54 53 50 48 46 44 42 41 40
- 仏事作法のひとつこま／近松誉
どうぼうパズルdeひとやすみ
録音から立ち現れる 東本願寺の「音景」／柳沢英輔
古写真でつづる東本願寺
あなたのとりの僧侶
哲学者と僧侶／中山善雄
一切の幸せ／作〓岩川ありさ 絵〓物田紗希
生きづらいこの世界でも／竹田ダニエル
日々平熱のソウル／中田亮

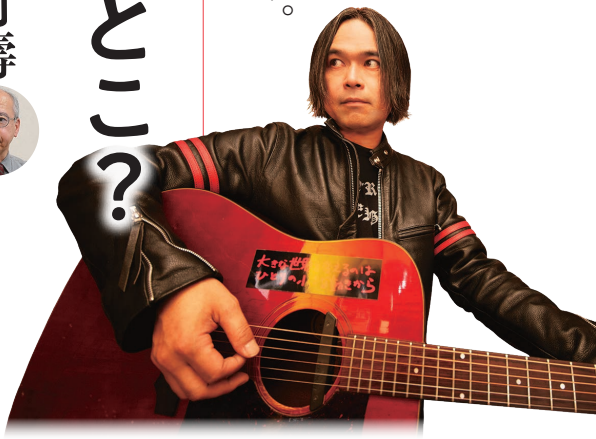


- 20 17 16 14 06 05
- 「楽」とは言えない現実に「ピュアランド」を見出していく／名倉幹さんに聞く
あまりにはるかな彼方から／奥田直美
浄土に冴える鳥の声／文〓福田琢 絵〓大島加奈子
銭湯と極楽／湊三次郎
「対談」 若松英輔×二階堂行壽
極楽は、地獄とも呼ばれる私たちの世界を包むのです。

「極楽」はどんなところ？

特別企画

02 インタビュー 中川敬
歌っている時、俺の脳内に、色んな顔が浮かび上がるんよね。



中川敬 (ミュージシャン)

1995年1月17日の阪神・淡路大震災から30年。

「時の流れを思うとびっくりするわ」と中川さん。

型にはまらないパンク・バンド、

ソウル・フラワー・ユニオンのボーカルで、

豊饒な詩情に反差別、反虐殺などの熱を織り交ぜ、歌い続けてきました。

30年前、被災地から声かけがあれば出向き、

99年まで約二百もの慰問ライブを開催。

その活動のなか生まれた一曲「満月の夕」は多くの人に愛されています。

震災後のさまざまな出会い、民謡の魅力、人間にとって歌とは――。

初めての避難所ライブ

震災が起きた95年1月末にバンドのメンバーが「避難所って、年寄りとか障害者、貧困層とかが取り残されていくような気がするねん。民謡とか歌ってまわらへん？」って言い始めてね。とにかく一回避難所に行こう、と。で、選曲を始めて。当時俺らはアイヌ、日本、琉球、朝鮮の民謡にハマっていた時期で、朝鮮民謡の「アラン」は絶対必要、沖縄民謡は「安里屋ユンタ」、アイヌ民謡の「アランペニ」は鳥取の「貝殻節」とメドレーにしよう、とか言いながら選曲を始める。あと、95年当時の60〜80代やったら学生運動の世代もいるはずやから、抵抗歌も要るな、「聞け万国の労働者」をやるう、とか話し合いながらね。

で、2月10日、避難所になったた、西灘駅そばの青陽東養護学校、そこが最初のライブ会場。結構大きな避難所で、学校の中に二千人くらいいて。灘区は倒壊で亡くなった人が多い地域でね。ライブ前は俺もメンバーも緊張感があつて。楽屋の教室から外を見たら、水道管が破裂して沢山の人が水汲みに来ててその横で、



歌っている時、俺の脳内に、

色んな顔が浮かび上がるんよね。

撮影：ウエノヨシノリ

ちゃんと「アリラン」のおばちゃん。

いのちで笑え 満月の夕

4日後の2月14日、長田区の南駒栄公園みなとこまっていう、今はシヨッピンゲモールになった、でっかい公園が避難所になって、そこでライブをやった後にドラム缶の焚火を囲んで被災者の人たちと酒を飲んでたら、みんながみんな、夜空を見上げて口々に「満月を見るの、こわいなあ」って言い始めた。地震のあった1月17日以来の一巡目の満月の夜で「そろそろ最大余震がくる」という噂が高まっていた時期だね。かれらの言葉が頭に残って、次の日に一気に書いたのが「満月の夕ゆづ」。新曲を書くのは日課やから、その時は、別に普通に「新曲を書いた」という感じ。ただ当時の緊張感、高揚感、神戸で見たもの、出会ったものをちゃんと歌に落とし込んでんだかなあかんって思ったのは覚えてる。で、98年くらいにある人が

リハーサルをしよう、と。楽器を持って行って、その横で演奏を始めたら「籠かごの鳥」を歌っている時に酔っ払ってベロベロのおっちゃんが「兄ちゃん、楽団ってええなあ」とか言ってる、演奏して歌ってる俺の腕をがーつとゆするわけ。目に涙をためて。咄はなに「おっさん、今演奏中や、手を離せや(笑)」って言ったら、おっちゃん「おー、悪い悪い(笑)」とか言いながら踊り始めて。そこで俺の緊張がほぐれたんよね。

当初は選曲に不安もあったけど、結果、大当たりだね。年寄りが喜ん

でくれた。そのライブ後に、あるおばちゃんが俺に近づいて来て「今回の震災で私な、子ども旦那も家も全部なくして一人ぼっちになってしまったんや」と。「このへん、そんな人ばかりや。だから、ずっとボランティアやってきたわ。でもな、ずっと泣きたかったけど、泣けなかったんや。あんたの歌った「アリラン」でやっと思いい切り泣けたんや」と。返す言葉がなくてね。「おばちゃん、元気でおってな。また来るし」みたいなことを言ったのは覚えてる。もしたら、おばちゃんがニカーツと笑っ

て俺の背中を思い切り叩いてね、「兄ちゃん、がんばりや！」って。「何かようわからんけど、この活動を続けよう」って腹の中で決まった瞬間やね。音楽やってよかったなって。ロックがどうかか歌詞がどうかか、慰問なのかチャリティなのかとか、もう全ての「意味づけ」をふっとばしてくれただのが、「籠かごの鳥」のおっ

「あんたの歌った「アリラン」でやっと思いい切り泣けたんや」と。

続きは本誌でどうぞ

特別企画

「極楽」はどんなところ？



「ああ、ごらく、ごらく…」。

湯ぶねにつかって、ふと独り言。

さながら「天国」のような世界として、

しばしば日常でも用いられる「極楽」という仏教語。

でも、極楽ってどんな世界？ 死んだら行くところ？

身近な疑問をもとに「極楽」をたずねてみましょう。

極楽は、地獄とも呼ばれる 私たちの世界を包むのです。

行くところ？ 帰るところ？ ここから遠い？ 近い？ 信賴できて、落ち着ける場所？

批評家の若松さんと僧侶の二階堂さんのお二人が「極楽」という言葉をめぐって思索します。



一対談

若松英輔（批評家） × 二階堂行壽（真宗大谷派僧侶）

「地獄」はよく聞くけれど…



若松 確かに表面的には極楽という言葉はそれほど耳にしませんね。私たちが生きる日常は厳しさを増していますから、地獄という言葉のほうが深く領^{うけと}けるということも理解できます。

けれども、なぜ私たちは地獄を感じ得るのか。それは単に地獄だけを知っているのではなく、地獄をも包みこむような何もの

かを知っているからではないでしょうか。

ですから、地獄だけがあって、極楽がないということはあり得ない。極楽は、地獄とも呼ばれる私たちの世界を包みこむようなちからをもつのです。人間は色々ものを分けて考えますから、地獄と極楽と、一旦は分けるとしても、その根底にはたらいている何ものかを静かに省^{かえり}みたいのです。

二階堂 積尊^{しきそん}が老病死を苦と見て、苦を超越^こえたいと思ったところから仏教は始まりました。ですから、極楽という言葉も、私た

ちが生きるうえで感じる苦しみに応える言葉なのでしょう。今のお話をふまえると、この言葉には苦を超えるだけでなく、苦を包みこむという大事な面もありますね。

「天国」みたいなところ？



若松 天国とは、キリスト教でいうヘヴン（heaven）の翻訳ですね。「天」とは、日本に來た宣教師たちが日本に根づいている儒

「極楽」はどんなところ？



若松英輔 わかまつ えいすけ

1968年生まれ。批評家、随筆家。慶應義塾大学文学部卒業。著書に『イエス伝』(中公文庫)、『藍色の福音』(講談社)など多数。近者に『自分の人生に出会うために必要ないくつかのこと』、『探していたのはどこにでもある小さな一つの言葉だった』(共に亜紀書房)がある。



二階堂行壽 にかいどう ゆきとし

1958年生まれ。真宗大谷派専福寺住職。大谷大学文学部卒業。著書に『通夜・葬儀のころ②』、『亡き方からのメッセージ 浄土真宗の葬儀』、共著に『僧侶31人のほけつと法話集』、『仏教のミカタ2』(以上、東本願寺出版)などがある。

続きは本誌でどうぞ

教を学び、日本人が自然に感じるように言葉を当てたのでしょうか。もう少し考えてみると、天とははるか空の彼方でありつつも、お天道様てんどうさまとも言うように親しみもあります。天地のことを「あめつち」とも言いますが、れども、私たちはその中間にいて、あめつちなしには生きられませんから、単に私たちを超えているだけではなく、そこから恩恵を受けてもいます。

極楽という言葉も同様ではないでしょうか。言葉のうえで人間の世界、仏の世界と二分しますが、この言葉はその真ん中ではたらいっています。私たちは生まれてきた瞬間から死に近づいていて、今はその間に

いるわけですから、その真ん中にはたらいしていることについて、もっと深めていい。そのときに極楽という言葉は入り口になつてくれますよね。極楽は究極の場所というより、目印にしなから進むためにあるように思います。

二階堂 親鸞は自分が受けとめた仏陀ぶつだ(釈尊)の教えを浄土真宗とあらわしますから、私はどちらかという浄土という言葉を使うことが多いです。逆に極楽という言葉はそれほど使わない気がします。先にあった「地獄」という言葉の対は極楽ですね。地獄・極楽という言葉はややもすると、あの人は地獄に墮ちる、私は極楽に生まれるという

ように、一人という感覚に近づきやすいかもしれません。

では、浄土の対は何かというと穢土えど。地獄・極楽との違いは「土」という言葉です。少し話が飛ぶようですが、仏教徒は仏・法・僧という三宝さんぼうを大事にします。仏陀、その教え、そして教えに帰依きえする人々です。これら三つの宝で仏教が成り立ち、そして歴史上、展開していくなかで、あらためて仏陀の教えを受けとめようとする人々のなかから、浄土という言葉が生まれてきたのでしょうか。

ですから、浄土というのはある意味で、仏陀とまのあたりにお会いするところ、「土」

浄土に冴える鳥の声

同朋大学学長 福田琢



「彼の国には常に種種奇妙雑色の鳥有り。白鶴・孔雀・鸚鵡・舍利・迦陵頻伽・共命之鳥なり」(鳩摩羅什訳『阿彌陀經』)——極楽浄土には色とりどりの六種類の鳥がいて、昼も夜も優雅に歌っているそうです。どんな鳥たちでしょうか。

白鶴(ハンサ)はインド神話のブラフマー神(大梵天)の乗り物で、白鳥やガチョウ等と同じ白い水鳥です。日本では鶴とされることもあります。美しい羽根で知られる孔雀はインドの国鳥です。

鸚鵡は喋る鳥として有名ですが、仏典の鸚鵡は多くが篤実な性格です。山火事を見つけた鸚鵡が、両翼を水に浸しては飛んで行き、空中で羽ばたいた話を御存知ですか。天神が「そんな僅かな水の飛沫では大火を消せまい」と嘲笑すると、鸚鵡は「かつてこの山の生きものたちに良くしてもらいました。たとえ消せなくとも、黙って見てはおれません」と答えました。感心した天神は雨を降らせ、火事を鎮めたそうです(『旧雑譬喻經』第23話ほか)。

舍利(シャリリカー)はインドの八哥鳥のようですが、ほかに鶯、百舌の一種、あるいは九官鳥ではないか、などとも言われています。

残る二種の鳥は、仏教がインドからアジアに広く伝わる間に、不思議な変容を遂げました。迦陵頻伽(カラヴィンカ)は本来、ウグイスのような小鳥でしたが、その鳴き声の涼やかな美しさから、

続きは本誌でどうぞ

戦争はもう嫌だ
戦争はもう嫌だ

この世界に平和を望んでいるだけ
共に暮らすのは全ての人の願
いなのに何故それが出来ないのか

"Why Can't We Live Together"
Jimmy Thomas, 1972.

教室のうしろ、ロッカーのうえに漫画本がずらりと並び、休み時間になると級友がいつせいに読み耽る——小学三年生の僕の思い出です。

担任だった後藤先生は快活でサバサバとした小柄な人で、自前のコミック本、とくに所謂「少女マンガ」や恐怖漫画をたくさん学級に持ち込んでいました。

「先生、なんでクラスに漫画がいつぱいあるん」

「先生な、マンガが好きやねん」

記憶にあるのは『悪魔の花嫁』『恐怖新聞』など、どちらもおっかない幽霊のお話です。僕たち児童はふるえあがって、否、わくわくしながら読みました。

四十年前の古き良き時代には小学校の先生にそんな裁量がみとめられていたのでしょうか、いや当時でさえも風当たりは強かったはず。校長先生や教頭先生の目もある中で、無理を通して教室に

第17回

日々平熱のソウル

中田 亮

後藤先生が伝えたかったこと

マンガを持ち込んでいたのではなかったか。それがきくと、教室に自由の風をおくりこむための先生なりのお考えだったのだろう、と今では思うようになりました。時は、文部省のモノサシで人を測る偏差値教育・受験戦争に拍車がかかっていた一九八〇年代の前半でした。

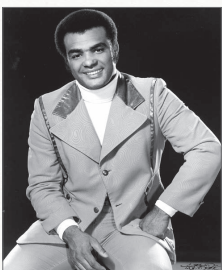
それから、後藤先生のちいさい漫画喫茶コーナーには『はだしのゲン』もありました。広島の「焼け野原」に生きるゲンの物語を夢中になって読みました。

誰の目にも愚かしい戦争が何故まかりとおってしまったのか、小学生の僕は不思議でなりませんでした。

日米開戦や日中戦争にいたった経緯を歴史の本で読めば戦争が起こるメカニズムがわかるにちがいない、そうすれば戦争をふせぐ方法だって分かるはずだ——僕は長いあいだそう思っていました。

ところが、今「ゲン」を読み返してみましたら中沢啓治氏は戦争を防ぐ方法もはっきりと示していました。

《おまえたちはだまされるんじゃないぞ
朝鮮の人や中国の人
みんなと仲よくするんだ
それが戦争を防ぐたった一つの道だ》



Timmy Thomas (1970年のポートレート)
(Photo by Michael Ochs Archives / Getty Images)

なかた りょう

1972年大阪府生まれ。ミュージシャン。ファンクバンド「オーサカ＝モノロー」のボーカル担当。アフリカ系アメリカ人の文化を扱った映画の字幕監修や翻訳なども手がける。

ゲンの父・大吉の言葉です。これは日本だけでなく世界中の戦争の真実を言い当てていると思います。
イスラエルでもロシアでもそして日本でも、政府や企業が憎悪を煽っています。それを民衆がはねのけることができなければ、国は目を蔽うような狂気へと導かれてゆくでしょう。

二〇二四年も戦争が無くならないまま終わり、また新しい年が始まります。

僕ら一人一人は戦争反対や自由・平等をどんな形でもいいから表現しよう。非力を顧みず後藤先生や中沢啓治氏に倣って、さまざまな方法で自分たちの世代や次の世代に伝えていきましょう。